

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

女四騎士 セパンア2

小説 羽沢向一

挿絵 あめいすめる

第一章	辺獄砦の夜明け前	006
第二章	グラルダンの三粒の真珠	033
第三章	黒い信義団	115
第四章	辺獄の淫らな手	152
第五章	忌まわしき時再び	216

※シリーズ第一巻「女囚騎士セリシア」のあらすじは254ページで紹介しております。

登場人物紹介

Characters



セリシア

名門だが勢力の衰えた騎士の家の一人娘。剣の腕は一流でグラルダン王国軍親衛隊第三分隊長を務めていたが、ガルチクの奸計により辺獄砦にて囚われの身に。

ガルチク

グラルダン王国親衛隊総隊長。傲慢で冷酷な野心家。反乱を起こして、グラルダンの新しい王となった。

ヴァーラ

ガルチクの部下にして愛人の女魔道師。

ベデュート

辺獄砦の一員。稀代の魔道士だが、善悪や利益には無関心。

ネイド

賞金稼ぎグループ「黒い信義団」のリーダー。セリシアに恨みを持つ。

キャノエ

「黒い信義団」の女魔道師。ネイドとは強い絆で結ばれている。

ダロン

黒い信義団の一員。大きな黒い人狼の姿をしている。

第一巻のあらすじ

グラルダン王国の親衛隊で分隊長を務める、強く凛々しい女騎士セリシア。

彼女は親衛隊の隊長ガルチクの愛人になるよう強く迫られたものをそれを断ったため、ガルチクの不興を買って陥れられてしまう。讒言によって「辺獄砦」と呼ばれる監獄へと送られるセリシア。

いったんはそこで荒くれ者の囚人たちを抑え込んだ女騎士であったが、ガルチクの愛人にして女魔道士のヴァーラに魔法をかけられ、非力な少女の姿にされてしまうのだった。ここぞとばかりに囚人たちから激しい陵辱を受けるセリシア。

しかし辺獄砦の一員ベデュートが作り出した魔成鎧によって、セリシアは大人の姿を取り戻す。囚人たちに逆襲するセリシア。だがその前に、反乱を起こして王位を篡奪したガルチクが立ちふさがった。

魔力によって身体を強化したガルチクの前に、セリシアは為す術もなく敗れてしまう。もっとも憎むべき者の手でもたらされる快樂に、女騎士の矜持が打ち砕かれていくのであった……。

セリシアは二人の王女のよがり声を聞き、両手に伝わる異なった女体の感觸の心地よさにしがみつぎ、腹で渦巻く激痛をごまかそうとした。だが、もう限界が来ていた。王女の二重唱が遠くなり、視界が暗くなつていく。

「はああっ、メイベルも出ちゃうっ！」

「アミーナ、出るわっ！」

はるか彼方から、声が聞こえた気がした。とたんに顔に四筋の母乳がぶつけられて、意識を現実に引きもどされた。

「あああ、イク！ メイベル、イクイク!!」

「くううう、アミーナ、イッチャううっ!!」

メイベル姫が首を左右に振り、上体をのけぞらせて、白い噴水を天井へ向けて飛ばしている。

アミーナ姫の小さな胸のどこからと思うほど、愛らしい乳首からも断続的に母乳があふれている。母乳噴出の拍子に合わせて、少女姫の口から喘ぎ声がこぼれた。

二人の妹の射乳絶頂の光景に刺激を受けて、マノア王妃も自分で胸を揉みはじめた。再び随喜蟲にしごかれていゝる肥大乳首から、新たに濃厚な母乳が飛び散る。王妃の指先が乳首の方向を変えて、セリシアの苦痛に歪んだ顔へ狙いをつけた。

「あああん、見て。セリシアの顔が、わたくしたち三人の母乳を浴びて、真っ白になつて



いますわ」

「あはあ、とつてもきれいよ、セリシア」

「これからは、あふつ、毎日アミーナたちのおっぱいを、セリシアにたくさん飲ませてあげる」

セリシア本人は顔をぬぐうのも忘れて、ガルチクに懇願していた。母乳まみれになって意識がはつきりしたために、いっそう激痛を覚えてしまう。

「早く！ 早く、貞操帯をはずして！ もう、死んでしまう」

「よかろう。よく耐えたぞ」

セリシアの脚に、ガルチクの太い両腕がからみついてくる。痙攣する女体が軽々と持ち上げられた。

「あ、な、なにを」

「こうするのだ」

三王女へ向かって、セリシアの両脚が大きく割り広げられた。褐色の肌に黒い貞操帯がきつく食いこんだ股間が、姫君たちの並んだ顔の前に差し出される。まるで幼女が母親におしっこをさせられるときの姿勢だ。大人の女がしてはならない恥辱の格好だ。

「や、やめろ。こんな格好は」

必死の訴えも、ガルチクを喜ばせるだけだった。女騎士は両手を背後のぶあつい胸板に

つっぱり、両脚をじたばたと動かしたが、国王の岩石のような身体はびくともしない。かえって腹の激痛を増幅させるだけだった。

「セリシアには褒美として、王妃が手ずから貞操帯をはずして進ぜよう。やれ」

「はい、陛下」

マノア王妃がうなずき、股間の秘部に貼りついた白い逆三角形の布の中に、細い指を差し入れた。布越しに指が肉唇を開くのが見えて、王妃の秘奥からべっとり濡れた鍵が出てきた。セリシアは愕然として、主君にたずねるしかなかった。

「マノア殿下、最初からガルチクの計画をご存知だったのですか」

「もちろんです。陛下のなさることには、すべて協力するのがわたしたちの務めですもの。さあ、貞操帯をはずして、すつきりとさせてあげますよ」

マノア王妃の両手が、セリシアの尻へまわった。当然、ほとんど水平に開いた太腿の間に、王妃の美貌が入ってくる。そればかりか、メイベル姫とアミーナ姫も好奇心に瞳を輝かせて、セリシアの下半身に顔を寄せてきた。

（こんな状態で、貞操帯をはずされたら）

結果は火を見るよりあきらかだ。そのおぞましい光景が脳裏に浮かび、セリシアは必死に叫んだ。

「いけません！ マノア殿下、今すぐわたしから離れてください！ 鍵は自分ではずしま

すから！」

「遠慮をしなくてもいいのですよ。わたくしの手で、セリシアの苦しみを取り除いてあげたいのですから」

「そうなのよ、セリシア」

「そうよ、セリシア」

三王女の声がきれいに調和して、カチャリと金属音がセリシアの尻の上で鳴った。今までたわめられていた反動で、貞操帯がはねるように腰から離れ、床に落ちた。

「ひっ、ひいい！」

下腹部と尻を覆う青い鎧が、溶けた蠟細工のようにぐにやりと曲がり、股間から垂れ下がった。大きく広げられた肉唇がまくれ上がり、太くて白い肉の棒がずると引きずり出される。

「すごいわ。こんな太いものをいつも啜えているなんて」

「あつ、お姉さま、お尻の穴からも出てくるわ」

肛門の縁もまためくられて、挿入されている魔成鎧の肉管が姿を現す。前後の秘穴から、人の男根よりも長い管がぬらぬらと伸びてくる光景は、とんでもなく淫惨だ。ガルチクが王宮を留守にしていた間、ずっと随喜蟲に胸を嚙られつづけた三姉妹にとっては、女騎士の肉孔を埋める怪生物の姿もおぞましいものではなかった。逆に、セリシアに対して深い

親近感をいだかせるものだ。

「いやっ！ どいて！ そこを、どいてください。殿下、お願いします、あつ、だめええっ！」

前後の穴から肉管が抜け落ちた瞬間、抱えられたセリシアの腰が無意識に跳ね上がった。セリシアは括約筋に神経を集中して、双穴をキュッとすぼめた。命に代えても、二つの肉孔を開くわけにはいかない。

だが体内からの圧力にはどうやっても勝つことができなかった。惨めな敗北を喫するのが定められた運命だ。

閉じた膣口と肛門が盛り上がり、一気に決壊する。

「ひぎいいいいっ！」

ぎりぎりまで薬液の排出を押しとどめようとしたセリシアの意志を完膚なきまでに破壊して、膣口と肛門から白い粘液が噴出した。

音が、王宮の一室に轟いた。強靱な意志でがまんにがまんを重ねた結果、セリシアの体内で粘液の圧力は驚異的なものになっていた。旗が暴風に煽られてうなりをあげるように、膣口と肛門が凄絶な勢いで噴出する白い液体に振動させられて、ビリビリと音を鳴らした。

それはセリシアの敗北と崩壊を高らかに宣言する、恥辱のファンファーレだった。両手で耳をふさいでも、自分の身体そのものを伝わって、肉の穴が奏でる凄惨な音楽が頭の中

で反響している。

「はああああっ……」

屈辱のファンファーレが轟くなかで、死ぬほどの苦痛が猛烈な快感へと反転した。排出液で膣壁と腸の粘膜をこすられ、小陰唇と肛門を内側から外へ向かって揺さぶられて、全身の神経が歓喜にわなないた。

肉体の法悦が、セリシアの心をもさらい、制御できない高みへと放り上げられてしまう。意識が真っ白な灼熱に燃やされ、無意識のうちに快感の絶頂を声に出して訴えていた。粘液排出の音響に、セリシアの独唱が加わった。

「ひっいいい、イク！ イクイクううっ!!」

国土の北端にある辺獄砦を出てライデルへ到着するまで、一日に一回は排出の快感を味わわなくてはならなかった。そのたびに、凄まじい快楽のなかで、人間として重要なものが白い液体と化して、膣と尻の穴から流出していく気がしていた。

「イクッ！ はあああつ、イクう、だ、だめ、うっんああ……マ、マノア殿下……」

自分では制御できない快感の洪水に流されると同時に、眼前で恐怖の光景がくりひろげられている。自分の膣や尻の中にあつた液体を、三人の王女に浴びせているのだ。これ以上主君を汚す行為があるだろうか。

「あああ、お許しを……お許しください、んんん……」



絶頂の余韻の中で全身を弛緩させたセリシアの顎を、ごつごつした武骨な指がつかんだ。顎をはずされそうな握力に、女騎士の顔が歪む。

「セリシア。なかなか見ごたえのあるイキっぷりだった。気に入ったぞ」

「……」

「今度は約束通り、大人になるところを見せてもらおうか。本当にできるんだろうな」

セリシアの足もとに、ネイドが赤い鎧を投げてよこした。

「もちろんだ。さあ、セリシア、魔成鎧をつけろ。今のおまえに、俺たちに歯向かう力がないことは承知しているな」

（今は勝機がない。恥辱に耐えるしかない。辺獄砦や鷹ノ巣宮でのことを思えば、今さらなにをためらうことがある）

セリシアは自分からドレスを脱いだ。本来の持ち主のことを考え、ていねいに畳んで、そつと近くの岩の上に置いた。腰を包む下着だけの裸になると、慎重に魔成鎧を胸に当てる。つづいて下着を脱ぎ、下腹部と尻の鎧を前後から下半身に押しつける。

「んっ、むううう……」

どうしても喘ぎが洩れてしまう。キャノエに操られた魔成鎧はいつもよりも急ぐように、セリシアの乳首と膣と肛門に薬液を注入してきた。腰の内側に薬液が充満して、煩悶する十四歳の肉体が性急に変化を開始する。

「あふっ、はんんんん……」

身悶えるセリシアの身長が伸びていくのを目の前で見て、バーマムが驚嘆の声をあげた。太い両手で、変化の途中の胸をつかんだ。

「こいつは驚きだ。本当に大人になっていきやがる。手の中で乳もでかくなってくぞ。おもしれえ」

成長の途中の乳房を揉まれて、痛みと気持ちよさが同時に湧き起こる。はじめての感触に、変化の最中のセリシアの顔が引きつり、腰が前後に動いた。

「んあああ、あ、はっくうう」

セリシアの身体が二十五歳のものになった途端、胸の鎧に二つの穴が開いた。自慰と薬液注入によって高くしこり立った左右の乳首が、外へと飛び出した。同時に下半身の鎧の股間部分が縦に割れて、女の秘部がさらけだされる。一度は太い肉管を呑んだ秘孔と肛門が丸く開いたままになっていた。

隠しているように隠すべきところをすべて露出している女騎士の格好に、山賊の頭目も自分たちも舌なめずりをした。

「こりゃあいい。素っ裸になるより卑猥な風情があるぜ。いいものを見せてもらったお礼に、親衛隊の分隊長様へ俺様の立派なものをご馳走してやらあ」

バーマムがいそいそと、やたらと金銀や宝石の飾りがついたズボンを下ろした。剛毛が

生えた尻と、凶悪なまでに堂々と勃起した男根が出現した。ダロンの巨大な獣根に比べれば小さいが、人としてはかなりの雄大さだ。本人も自慢の逸物なのだろう。恐れ入ったか、という顔つきを向けてくる。

「さあ、来い！」

そう言い放つと、山賊の頭目はいきなり地面に背中をつけて、仰向けに寝転がった。横たわったたくましい身体の中から、男根だけが高々とそびえている。

相手の意図が理解できずに、セリシアは羞恥の格好のまま立ちすくんだ。

「な、なにをしている？」

「なにをじゃねえ。早く、俺様の上に乗ってこねえか。俺様の腰にまたがって、自分で肉棒様を入れるんだ。こんなことぐらい、やったことがねえのか？」

(こんな体位は、はじめてだぞ)

ガルチクもゾーゲムも他の囚人も、必ずセリシアを組み敷くか、子供のように抱きながら交わった。自分から男の上に乗っていくのはしたことがない。

しかたなく、セリシアは横たわるバームの剥き出しの腰をまたいだ。横幅のある身体なので、大きく脚を広げなくてはならない。セリシアもまた肝心なところが丸見えの股間を、下から見上げられてしまう。山賊のいかつい顔が、露骨にやけている。

「へっへっへ。絶景だぜ。いやらしい穴が二つとも丸見えだ。女をまたがせるのは、これ

だからやめられねえ」

セリシアの顔が赤く火照った。過去には肛門をしゃぶられたことすら何度もあるが、こんな角度でながめられるのは、とてつもなく恥ずかしく感じる。あわてて見つめられている部分を両手で押さえようとしたが、バーナムにどなられてしまう。

「この馬鹿野郎が！ 誰が隠していいと言った。そのまま腰を落として、自分から俺様のモノを啜えるんだ」

「わたしが、自分で入れるだと！」

「そうだ。早くしやがれ！」

（そんな、みつともないことを、大勢が見ている前でやれというのか……）

無視しようとしても、視界の端々に山賊や賞金稼ぎたちの姿が入ってくる。押し倒され、巨体の下敷きになり、無理やりに入れられるのならどうしようもないと、自分で思える。

（わたしを娼婦あつかいする男のモノを、自分から入れるなんて……恥ずかしすぎる……いいや、セリシア。おまえは心を決めたではないか）

セリシアはそろそろと膝を曲げた。開いた股間に、山賊の黒ずんだ亀頭が接近してくる。だが、魔成鎧に開いた割れ目に触れた途端、亀頭が滑って、横にずれてしまう。

「なっ、ああ、そんな」

セリシアはあわててもう一度捕らえようとするが、また亀頭が勝手に逃げていく。三度

目、四度目も失敗に終わった。

「下手くそめ。なにをしてやがる！」

バーナムが怒声を発した。しかし、そのいかつい顔はセリシアの恥態を楽しんでいることを隠そうともしていない。

「無理だ、こんなことは」

「馬鹿野郎。自分の手で握って入れるんだ。そんなこともわからねえのか！」

「わたしの手で！ そんな情けないことができるものか」

「情けなかるうが、なんだろうが、おまえはやるしかないんだぜ」

言い返せなかった。すべて、やるしかないのだ。右手をそろそろと下へ伸ばし、亀頭の下部分を握った。熱が、掌に伝わってくる。

（くそっ！ くそくそっ！）

何度も何度も胸の中で毒づきながら、自分の手で固定した亀頭の上へ、五度目の挑戦をする。亀頭が魔成鎧の割れ目を通り抜けて、セリシアの秘唇に触れた。

「うんんっ！」

不快とも快美ともつかない感触が、ピリピリと全身に伝わってくる。セリシアの動きが無意識に止まってしまふ。

（だめだ。自分から挿入するなど）

突然、周囲から何本もの山賊の手が伸びてきた。セリシアの両手両脚ががちりとつかまれる。

「なにをする、うあああつ！」

そのまま一気に下へ押し下げられる。野太い亀頭と肉幹が、容赦なく女騎士の膺の奥まで侵入してくる。一度果てたばかりの過敏な肉洞がえぐられ、鮮烈な快感の火花が炸裂した。

「あひいっ！」

「うわはははは。これこれ。この無理やりな感じがたまらねえ。てめえら、もっとセリシア様を悦ばせてやれ！」

「へい、お頭」

山賊たちがつかんだセリシアの四肢を、大きく上下に揺さぶった。複数で揺すっているのので、どうしても手足がばらばらの動きになり、予想のつかないリズムで身体を振りまわされる。下手な操り人形のように身体が跳ねるたびに、新たな角度と方向で肉棒を受け止めさせられ、常に新鮮な快感を与えられることになった。

「ひいっ、あひっ、ひああああ、やめ、やめて、離してっ！」

「遠慮することはねえ。もっと楽しんでませてもらえ。ディング、おまえも入れろ」

「ありがとうございやす、お頭」

バーマムが目についたというだけで適当に選んだ部下が、ズボンを脱ぎ、頭目の脚をまたいで、セリシアの背後に立った。他の子分たちが嬉々としてセリシアの腕を引き、女騎士の身体をバーマムの腹の上へ倒した。また大きく膣内の剛直の角度が変わり、新たな悲鳴とよがり声の混ざった叫びがほとばしる。

「あうううっ。ああっ、いやああ」

セリシアは悲鳴をあげながら、雄大な肉棒を咥えた股間を、背後の凌辱者に捧げる姿勢になつてしまう。ディングガが自分に向けられた女騎士の尻を見つめ、鼻息を荒くする。

「なるほど。このいやらしい鎧はじつに男心をそそりやすな」

ディングガの両手が、セリシアの子供の尻たぶをつかんだ。爪を立てられ、尻肉をこねられる。その動きが、巨根の入った膣をいっしょにこねまわし、セリシアの視界に白い星がいくつも飛び散った。

「おあうっ、おとおお、はううっ！ 尻、尻をいじらないで、ふああああ」

「ああ、いい揉み心地だぜ。いい女つてのは尻までいいもんだ。では、失礼して、尻の穴に入れやすぜ、お頭」

「ああ、どんと来い」

「やめろ！ 二本は、二本はだめ、うあああああっ！」

ディングガの肉の凶器は比較的細かった。しかし長さはたっぷりとある。硬い槍をねじり



こむように、セリシアの肛門に叩きこまれた。

「ひぎいいいいっ！」

わめくセリシアの声に負けまいと、バーママが大声を出した。

「今だ。もう一度、セリシアを子供にしろ。できるんだろう」

キャノエが杖を動かし、詠唱した。セリシアの身体にまた異変が起きてしまう。

「な、なんなの、あああ、こんな、こんなときにっ！」

二本の肉棒を埋めこまれた前後の二穴から、新たに男根の動きとは異質の快感が生まれだ。セリシアにとっては毎日一回ずつ味わわなければならぬ快感だ。セリシアを大人にしている魔成鎧の薬液が、体外へ排出されようとしている。

「そんな！ さっき大人の姿になったばかりなのに、んああ、それに入れてままでなんて、くああああっ！」

バーママの巨根を根元まで食い締めていた膣の入口がぶるぶると震え、大きくまくれた。わずかにできた隙間から、凄まじい勢いで白い薬液が噴出する。

わずかに遅れて、肛門でも同じ現象が発生した。ディングの細長い勃起の周りで肛門のしわがまくれて、強烈な白い噴水が飛んだ。

前後の穴が肉棒でふさがれて、ごく狭い隙間からしか排出できないだけに、噴出の勢いはいつも以上に凄まじいものとなった。それぞれバーママとディングの腹を打ち、山賊の

鍛えあげた強固な腹筋を振動させた。

憎い男たちに白い液体をぶっかけながら、セリシアは一気に二度目の頂点へと、自慰などで得られる頂点よりもはるかに高い場所へと、飛翔させられる。

「ああおおうっ！ イクっ！ イクイクっ、またイッちゃうっ!!」

二度目の絶頂に上げられると、新たな異変が発生した。身体が縮んでいる。本来は薬液を出したあとでも、すぐに子供の身体になるわけではない。身体に変化が起きる前に、再び肉管が挿入されて、新たな薬液が注入されることで、子供になってしまふのを防ぐのだ。

だが、今回は次の薬液の注入がない。しかもかつてない速さで、子供への変身がはじまっている。それは、山賊の剛棒を咥えた肉穴も小さくなるということだ。パーマムとディングガがそろって、肉棒に与えられる新たな歓喜を口にした。

「おおっ、締まる。こいつはキュウキュウ締まっていきやがるぜ」

「たまらないですぜ、お頭。尻の穴がどんどん狭くなりやす」

二人の凌辱者に与える歓びが大きくなっているということは、セリシアが感じる衝撃も大きくなっている。

「はああっ、太い、太ひいっ！ 前も、後ろも、わたしの中でどんどん大きくなっていく。いやっ、いやああああっ！」

「おおう、たまらん！ こんなに早く出すのははじめてた」

「あっしも、こんなに具合のいい尻の穴は知りませんぜ。ああうっ」

「ふやあああああっ！」

十四歳になったセリシアの膣と肛門に、同時に大量の精液がぶちまけられる。腹と尻に感じる熱さが、自分自身の肉体を他人に自在に操られる情けなさをより深くした。

「よし、交替だ。アグール、今度はおまえが尻を掘れ」

「へい、喜んで！」

威勢のいい返事とともに、顔に大きな傷のある男がやってくる。デインガがアグールと掌を打ち合わせると、セリシアの尻から男根を引き抜いた。肛門がまくれて、腸液でどろどろになった粘膜が現れる。

「あっんん！」

口を開いたままの肛門から、魔成鎧の葉液とデインガの精液が混濁したものが、とろとろと白い糸を引いて地面に落ちる。

「ちよっと待ってる。体位を変えてつづけてやるからな」

バーマムがセリシアと性器同士でつながったまま、地面から身体を起き上がらせた。またもや次々と勃起の方向と角度が変化して、セリシアは荒れ狂う快楽の嵐に翻弄される。

「ひいいっ、だめ、うっ、動かないで！ はうううう！」

立ち上がったバーマムの腰に、小さなセリシアの身体がくっついていて体勢になった。

ほとんど無意識にセリシアは山賊の背中に両腕をまわし、腰に両脚をからみつかせて、少女と化した身体を空中に浮かせている。だが、手足にはほとんど力を入れられなかった。かつてガルチクがやったように、バーマムも膣に挿入した逸物の勃起力で、セリシアの体重のほとんどを支えている。

筋骨隆々の野卑な巨漢の腰にすぎる少女の姿は、まるっきり大木にとまる小さな虫けらそのものだ。連続する悦楽にブルブルと痙攣するセリシアの肛門から、新たな混合白濁液がたらたらと滴り落ちていく様子は、傷ついて死にかけている虫にも見えてしまう。

「こりゃこりゃ、とんでもなくだらしのねえ尻穴だね」

アグールがケラケラ笑いながら、水漏れにふたをするように、自身の肉刀を肛門に押し入れた。新たな尻の凌辱に、セリシアはほとんど反射的にバーマムにしがみついてしまう。もちろん、そんなことをしても膣の剛根がより深くえぐってくるだけだ。そこへアグールの亀頭が押し入ってくる。

「ひぎいつ、いやっ、ふああああ」

アグールの傷だらけの顔が予想外の幸運に明るくなった。

「けっへへへ。お頭、こいつは本当にすげえ尻をしてやすね。こんなにくいくい締めつけてくる女は、生まれてはじめてでさ」

「よし。俺様ともう一度イカせてやろうぜ」

「承知しやした！」

セリシアの小さな身体を挟んで、二人の山賊が激しく腰をぶつけ合った。逃げ場のない十四歳の少女の中で、薄い膜を挟んで力強い勃起がこすれ合う。特にバーマムの巨根の力強さは、とても一度射精したモノとは思えなかった。

前後からの挟撃が、セリシアの中で快楽の竜巻を巻き起こした。開発された十四歳の肉体は、黒い肉悦の渦に吞まれて、三度目の絶頂へと吹き飛ばされる。いやいやと首を左右に振りながら、無意識のうちに胸の魔成鎧の穴から突き出した乳首を、バーマムの厚い胸板へこすりつけてしまう。

「ううんっ、胸が、胸、出る、ふあああああっ！」

子供の小ぶりの乳房に残った薬液が、乳首を颯られる快楽に誘われて、外へと飛び出した。朱色に染まった肉の筒の先端が開き、白い液体が左右同時に噴出する。

「ほおおおうっ！ 胸っ！ 乳首っ！ おおおううう、乳首、出てるうっ、乳首出てるのっ！ イク！ 乳首でイッチャうううっ!!」

「おおっ！ こいつ、乳を噴きながら、もっときつく締めつけてくるぞ」

「尻もできさ。うひょう。きつききつい。うひよひょうっ！ お頭、あっしはもう出しちまいますぜ」

「おう、たっぷり出して、腹の中をおめえらの精液でいっぱいにしてやれ」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>